



Title	2005年度 岩見沢校学士論文等概要
Author(s)	
Citation	年報いわみざわ : 初等教育・教師教育研究, 27: 43-50
Issue Date	2006-02
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8808
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

2005年度 岩見沢校学士論文等概要

〈学校教員養成課程〉

教育発達臨床系

学校教育

今年度は、以下の14編である。

「家庭教育・躰のあり方」「明治期における近代天皇制の代表的な教育政策としての教育勅語に対する考察」「国旗・国歌教育の史的研究」「明治30年代における国民科論の発生と展開について」「北海道生活綴り方の先駆者 木村文助の実践」「学力の国際的基準についての研究」「消費者教育への提言」「戦後日本におけるしつけと子育ての変遷」「英語のリズムとイントネーション—小・中学校で英語を担当する教師の教則を目指して—」「教員養成大学における教養教育について」「小学校の交流教育における教師間の関係・連携に関する質的研究」「就学段階における障がいのある子どもへの「移行支援」に関する研究」「通常学級の国語授業における学習困難児への指導法の研究」「小学校における知的障がい・情緒障がいに関する研究」

心理学

今年度は以下の9編の論文が提出された。

「看図作文プロセスを活用した発見能力の育成—絵図の創造的読み—」「聴覚障害青年における親子関係と障害の受容、またそれらの関連について」「社会的スキルと共感性が社会的行動に及ぼす影響について」「バウムテストの信頼性について」「対人関係における嘘と対人恐怖心性」「人の作業効率に及ぼす香りの効果」「大学生の日常生活における不安と大学に対する適応感の関連性」「口紅使用による自己評価の変化と他者評価との関係について」「カラーシンボリズムテストの妥当性について」。いずれも実証的な研究である。

総合教育

第一研究室は、「戦後における『愛国心』論と教育実践の分析—歴史教育者協議会の『愛国心』論を中心に—」、「学校教育における『地域』と学習の理論の整理」、「日本作文の会における日記指導論と実践の展開と分析—書くことを通じた仲間づくり、子どもの人間関係形成を中心に—」の三本が、第二研究室は「ニュース報道におけるメディアリテラシー教育についての—考察」、 「日本におけるシュタイナー学校の歴史と現状」、「子どもの知性を伸ばす『豊かな環境』設定—脳科学から見たEQと多重知性—」、「民俗芸能が地域に果たす役割を探る—黒森流西の里権現舞の取り組みから—」の四本、計七本が提出された。

社会・言語教育系

国語

近代文学1、国語学（日本語学）1、国語科教育2の計4編の論文が提出された。

①「松本清張論—初期作品と昭和三〇年代推理小説—」、②「文学作品の言語学的分析—「ごんぎつね」を中心に—」、③「詩教材—どのように教えるか—」、④「国語科教育の文学的文章における分析批評の考察—「春」の授業研究への応用—」。

②は「ごんぎつね」の全文の構造を言語学的に分析するなど努力のあとがうかがえる。④は分析批評と読みの授業との関係をまとめた好論文である。

書写教育

本年度は「唐・太宗の生涯とその書」「褚遂良の書芸術についての一考察」「唐の文化と顔真卿の書について一考察」という論文三編が提出された。唐という中国歴代の王朝の中で最も隆盛を極めた時代の書を代表する人物を取り上げている。それぞれがこの時代の中で書的に果たした役割、そしてその書芸術のあり方について日頃の学書成果を一つの視点として捉えている点が共通していた。

外国語

今年度は13名の学生が論文を提出した。内訳は文学関係が12本、教育関係が1本であった。論文のタイトルは以下の通りである。 Uchiyama, Y. "Childhood in Three Stephen King's Works: 'The Body,' 'IT and Hearts in Atlantis,'" Ito, S. "A Study of the Rebellions in Alan Sillitoe's *Saturday Night and Sunday Morning*, *The Loneliness of the Long Distance Runner*, and *The Ragman's Daughter*," Iwase, K. "A Study of Nonsense in *The Alice's Adventure in Wonderland* and *Through the Looking-Glass*," Iwade, A. "A Study of *Winnie the Pooh*: Humor of *Winnie the Pooh's World*," Iwami, T. "The Effects of Question Type, Text type and Listening Strategies on EFL Learners," Listening Comprehension," Shibuya, N. "The Human Nature in Graham Greene's *Brighton Rock*," Takeda, H. "A Comparison of *Shoeless Joe* and *The Catcher in the Rye*," Tamura, H. "The Effects of Quotations of Nursery Rhymes in the Mary Poppins Series," Nakajima, T. "A Study of Lady Macbeth: As the Fourth Witch," Nishimoto, S. "A Study of *Cathedral* of Raymond Carver," Mikawa, K. "African Problems in *Anthills of the Savannah*," Murata, Y. "A Study of Kate Chopin with a Comparison of *The Awakening* and 'The Storm,'" and Watanabe, S. "A Study of Narrator, Nelly Dean in *Wuthering Heights*"

歴史

本年度は、日本史分野3編、外国史分野4編の計7編の学士論文が提出された。その論題は、以下のとおりである。

高橋賢右「三木武夫内閣退陣過程に関する一考察—衆議院の解散権行使を手がかりに—」、山崎亘「近世武士道の道德規範—延宝・天和期の弘前藩と山鹿素行学—」、吉岡牧子「大政奉還以降における徳川慶喜の政権構想」

池田巧「ドイツ帝国と世界政策」、高尾友一郎「『反日感情』—なぜ韓国は日本が嫌いなのか—」、宮崎俊和「古代ギリシア人の恋愛感情—恋の世界への誘い(いざない)—」、山本勝洋「人類の歴史から戦争はなくなるのか—イラク現代史を題材に考える—」

例年どおり、日本史では史料に立脚して論を進めていこうとする志向性が、外国史では現代的関心から思考をめぐらせていこうとする傾向が、それぞれみられた。いずれも一定の水準に達した叙述が叶ったように感じられる。今年はいわゆる現代史(戦後史)に材を取った論考が目立ったが、混迷する世相を反映しているというべきか。

法 律 学

今年度は4名が卒業論文執筆に臨んだ。いずれも現在の日本の社会問題を意識して選ばれたテーマである。「デジタル化時代における著作権制度の在り方」はCDやDVDの複製が容易になった昨今の現状から、著作権制度の問題点を指摘しようとしたものである。「若年労働者問題について」は、やはり社会問題となった感のある『ニート』に関し、彼らのための労働・社会保障法制度はどのようにあるべきかを考察した力作である。「性同一性障害特例法についての一考察」は、まだ新しい同法を他国の法制度と比較することによって、そうした障害者らが生きやすくなる社会を目指すために、との人権論的視点から論じられた。「憲法9条についての一考察」は、改憲論を歴史的視点から見直し、9条はどうあるべきかを真摯に考察したものであり、困難な問題について真正面から向き合う姿勢に好感が持てる一作となった。

社 会 学

本年は3編が提出された。論文「ODAをどうすべきか」は、膨大といってよい資料に丹念にあたり、丁寧な分析にもとづく考えがよくまとめられたもので、卒業論文としては近年に類を見ない佳作であったといつてよい。論文「環境政策の考察」も、国際的な動向から地域レベルのさまざまな試みまでへの目配りをふまえて、環境政策の問題点と課題を析出しようとしたもので、意欲的であり、すぐれている。論文「家庭内におけるジェンダー問題について」は、夫婦別姓問題への関心が、高齢者介護の問題から、さらには固有に日本的な「ジェンダー問題をもたらすメカニズム」としての「家の歴史」や「家制度」の考察にまで進んだもので、とくにその歴史的研究の面で深みを獲得したものであるが、考察の2、3の重要場面で、筆者の主観に引き寄せた解釈が見られ、惜しまれる。

倫 理 学

今年度の卒業生は5名で、卒業論文は、『武士道』と『菊と刀』から現代日本文化の礎を探る」「フロイトにおける夢の解釈」「死生観についての考察—儒教を手がかりに」「デカルトの哲学原理」「ヨハネ福音書における思想観」の5編であった。いずれも各自の問題関心に基づいて古典的な思想に取り組んだものであり、時間的制約のなかで論文をまとめあげた努力は、高く評価したい。

社会科教育

本年度の提出論文は4件である。「学校教育におけるアイヌ民族に関する学習について」は、北教組教研における実践レポートの変遷を概観し、千歳市立末広小学校の実践の意義を整理したものである。「若年層の政治参加～政治意識の醸成と政治教育～」は、政治参加の概念を整理し、特に国政選挙における投票率の変遷を分析したものである。「食糧政策の変遷と新たな米づくり」は、明治期からの食糧政策を概観し、特に食糧管理法の変遷をふまえて今日の米政策の課題を整理したものである。「戦後学校給食の変遷と今日の学校給食の役割」は、学校給食の変遷を概観し、食育に取組む学校給食の事例を整理したものである。

自然・生活教育系

数 学 宮下ゼミ

学校数学の主題研究、教材開発、成果発表。

「国際交流デー」で英語プレゼン、岩見沢市主宰「衛星利用遠隔学習」で遠隔授業（「チャレンジプロジェクト」に採用、北海道地域教育連携フォーラムで発表）、北海道デジタルコンテンツ学生作品発表会でプレゼン。

菅原ゼミ

幾何ゼミでは古典的な行列環のキリング形式を求め、それらが半単純リー環となることを見た。さらにそれらのカルタン部分代数を求め、ルート分解を求めルート系の概念について考察した。

後藤ゼミ

具体的な自然現象や社会現象を数理モデル（偏微分方程式の初期値・境界値問題）として記述し、解析的に解くことを学んできた。特に、フーリエの方法を身に付け、解の可視化にも取り組んだ。

大森ゼミ

高木貞治著「初等整数論講義」を輪読した。

物 理 学

本年度の学士論文は次のとおりである。「熱と温度に関する理科教材作成の試み」（河合一臣）は、混同されがちな熱と温度について、その概念の発達過程を捉え直し、温度計を教材として授業案の作成を試みた。「雪結晶の形態的特性に関する研究」（佐々木雅昌）は、天然の樹枝状雪結晶の枝の接合成長について、雪の液相成長の仮説をもとに考察を行った。「過冷却水中に生成する氷結晶について」（土田幹晴）は、低温実験室において過冷却水のなかに羽状や樹枝状の結晶を生成させ、その成長の連続観察を行った。「MRIを用いた内部構造の可視化実験」（佐藤詠宣）は、ポータブル核磁気共鳴装置を用いて対象物の内部構造を可視化し、理科教材の可視化について考察した。「音色の教材化に関する研究」（廣嶋 純一）は、弦楽器や声をサンプリングし、FFTによりスペクトル解析を行い、音色の周波数特性を考察した

化 学

以下の2件の卒業研究が報告された。

片井完和：簡易型CD分光器に関する考察

遠野真衣：硫酸銅5水和物の昇温実験に関する考察

生 物 学

（植物分野）木村勝人「ボルボックスの接合子形成におよぼす単色光の影響」では、従来知られていない緑色光による有性生殖誘起を、また、中嶋繁登「ボルボックス科緑藻類3属の有性化における光波長および明暗周期の影響」では、特に青色光が有効な有性生殖誘起と、暗黒下で酢酸ナトリウムを利用して有性生殖するものがあることを明らかにした。さらに、小林巧治「岩見沢および近郊における樹木の偏形度と環境」は、樹木の偏形の方向と度合から、岩見沢市における春から秋の風環境を生態学、植物気候学から把握しようとした従来にない試みである。

（動物分野）蜂谷友祥「キイロショウジョウバエ (*Drosophila melanogaster*) におけ

る FRU タンパク発現細胞群神経投射パターンの解析」では、ショウジョウバエ成虫の脳地図を作製し、FRU 発現神経細胞の神経投射パターンを明らかにした。

地 学 2005年度の卒業論文は、「道民の森月形地区」の新第三系の層序と古環境である。本研究の主要課題は、①海成中新統望来層の地質年代と古環境、②調査地域周辺における新第三系の層序学的再検討、③調査地域の新第三系の微化石分析に基づく地質年代の決定である。

①については、有効な貝化石の産出が確認されず、新たな情報は得られなかった。②に関しては、詳しい野外調査により、新第三系各層の層序関係をほぼ確定することができた。また、③について、年代決定に有効な珪藻化石が各層準から産出し、新第三系各層の詳細な地質年代を明らかにすることができた。

以上、綿密な野外調査データに加えて、室内作業でも重要なデータが得られ、月形町周辺地域の新第三系の層序や古環境の解明に新たな知見をもたらした。

理科教育 本年度は、「生活科における自然体験学習（ネイチャーゲーム）の導入プランの作成とその検討（信野大樹）」および「小学校の「総合的な学習の時間」における自然体験学習の導入（塚原啓太）」の2編が提出された。現代の学校現場でも自然体験学習の実施は推奨されているものの、「どのような学習が実現可能なのか」「どのような実施が効果的なのか」については明示的ではない。上記2つの学士論文は、その点を整理することを目的とし、あわせて自然体験学習のパッケージドプログラムが生活科や総合的な学習の時間の教育課程にどう位置づけられるかについて考察したもので、主に学習計画の作成を行なったものである。今後は実際の学校教育の場でこれに基づいた実践的な検討が望まれる。

生活科学教育 「スポーツドリンクの必要性と意義」（池田久恵）・「食事作法の役割とこれから」（伊丹奈央）・「フランス菓子の歴史とお菓子に関する考察」（相下寛子）・「食生活における健康と精神的な要求」（堀川はるな）は、食に関わる現代課題を歴史の変遷、意識調査、メーカーの取材、文献調査等により検討した。「寝衣の快適性と教材開発の試み」（坂田朋美）は教材開発を行い、「現代の若者のファッションと内的要因について」（成山麻奈美）は服装選択に性差が影響していることを、「衣服の変遷と服装のユニセックス化についての考察」（野原真梨子）は服装史からユニセックス化の要因を明らかにした。「おもちゃと育児雑誌から見た現代育児事情」（園田智子・福永幸絵）は大衆消費社会における育児の課題について検討した。「これからの北の住まい」（増本宗之）は北海道の住宅に求められる構造を文献調査により明らかにした。なお、食物学教員の欠員により、4名の学生の卒論指導は非常勤の先生にお願いした。

体育・芸術教育系

音 楽 音楽教育分野で「リトミックにおける五感と連動した表現力育成」～阿部愛子。「僻

地校における音楽科の複式授業」～上ノ澤千尋。「音楽聴取における感じ方のちがいー聴取スタイルと過去経験」～岸本知佳。「子供の聴感覚を拓く音楽教育の構想～音を良く聴く活動の教育的可能性」～矢萩尚子。鍵盤楽器分野で「ソナタ形式の誕生から確立までの変遷について」～市川寛子。「ロマン派の曲を現代のピアノで演奏する方法」～尾崎絵里子。管楽器分野で「ラテン音楽の特性と人々との関わり」～加藤里美。「和太鼓の歴史と現代の太鼓音楽の発展への考察」～蒲田新平。「フランス・プーランクの音楽とその特質～フルートとピアノのためのソナタについての考察」～高泉一輝。「サクソフォンの歴史と変遷～ジャズにおけるサクソフォンに関する考察」～渡部みどり。以上、今年度の論文は10編であった。

美術

卒業論文提出者は8名。絵画2、版画1、工芸2、彫塑2、美術教育1である。「アニメーション映画監督・宮崎駿の原点」は現代文明に対するアンチテーゼと精神の拠り所の重要性を説く力作。「変容する美術館」は受動的美術館から能動的美術館へ変わらなければならない現状の報告と考察。「版画の大衆性についての一考察」は版画の二極化を暗示。「これからの住まい～伝統民家からの教え」は自然素材の人に優しい住まいや空間の必要性を説く。「自然と人にやさしいユニバーサルデザイン～公園・森林施設での導入に関する考察」は実際に札幌圏の公園施設を実証し、その欠点と改善を示唆した佳作。「人形の役割と効用」は人形を通して私を深く洞察した一種独特な世界の表出。「現代アートとファッション・デザイン～表現素材としての衣服について」は現代芸術の多様化が様々な領域においてアートすることが可能であり、また現代・未来の視座ともなり得ることの論述。「ブック・デザイン～本の歴史とこれから」ではその歴史（文学、紙、印刷技術、アート）を論じ、未来電子ブックまでを論述。またそれぞれの制作も個々に苦心の表れた力作が提出された。

体育

第1研究室

「高校テニス選手における心理的競技能力について～性差、競技年数、競技成績を比較して～」(新渡菜央子)

「トッププレーヤーとして活躍するために必要とされる要素について～北海道選抜選手と選抜に選ばれなかった選手の意識を比較して～」(熊谷卓郎)

「岩教大サッカー部のサイド攻撃に関するゲーム分析～日本代表との比較から～」(伊藤拓)

「体育・スポーツにおける男女平等に関する一考察」(前田瞳)

「学長杯における指導学生の発話内容の変容と選手の心理的競技能力について」(松山佳樹)

第2研究室

「恋愛感情がスポーツ行動のパフォーマンスに与える影響」(熊谷真澄)

「スポーツ集団における組織文化に関する一考察～秋田県A高校男子バスケットボール部の礼儀・遊び・表象・共有価値・無自覚的前提に焦点を当てて～」(佐藤晋太郎)

「積雪・寒冷地域における冬期間体育授業の現状～北海道岩見沢市内小学校におけるスキー学習の実態～」(辰田章人)

「小学校体育の実態に関する一考察～北海道 I 市の小学校に通う児童の保護者の観点から～」(宮崎直也)

「運動部活動における体罰の再生産過程に関する一考察～教員養成系大学の保健体育科教員免許取得予定学生の調査を通じて～」(古内良輔)

「スポーツ教育モデルの中学校における実践研究～スポーツの生活化を目指して～」(木下裕子)

第3研究室

「バレーボールのブロックジャンプに関する研究～2種類の跳躍方法について～」(佐藤裕之、長田勝博、西山泰司、長谷川倫樹)

第4研究室

「青年期の友人関係の持ち方と対人ストレスコーピングおよびストレス反応の関わり」(佐藤政博)

「家庭内における人間関係と社会性形成の関連性」(福家明子)

「女子大学生を対象とした主観的な月経随伴症状の軽減のためのセルフケアを組み合わせた簡便なプログラムの一考察」(田中麻美)

第5研究室

「漸増負荷運動による二軸走法が心拍応答ならびに血中乳酸動態に及ぼす影響について」(村上雅之、木崎次郎、山本俊郎)

〈社会教育課程〉

社会教育コース・教育学グループ

膨大な分量の論述で詳細な検討をしているのが、「なぜジーンズは日本でファッションアイテムとして定着しているのか～アメリカと日本におけるジーンズの開発とそれにまつわる社会的・文化的背景の歴史、消費者の視点から検証～」(今井敏之)リベットやポケットのつけ方まで歴史があることがわかる。やはり膨大な大作は「世界自然遺産知床における自然保護の一考察」(坂西真也)。知床の自然の持つ諸問題を網羅するように記述。“知床大百科”のようであり、まとめは市民主体の管理、観光客をも含めた社会教育の課題を浮き彫りにした。実際に後輩を使ってトレーニングを実施。データに基づいて論文をしあげたのは「バランスボールを用いたトレーニングによる初動負荷理論の実践とその有効性の検証及び考察。」(松井心平)。「北海道におけるスローフード運動に関する考察」(及川翔太)はイタリア発祥の運動と北海道の取り組みを考察。「ニート支援に関する考察」(寺町彰洋)は諸説を検討のうえ実際の支援グループを訪ねて実践的な課題を明らかにした。「絵本の可能性と未来」(常俊侑里)は絵本の芸術としての可能性をしめした。

社会教育コース・文化人類学グループ

今年度の卒業論文提出は、以下の4点であった。齋藤恵理「社会現象としての病気：西洋中世のペストを中心に」、佐々木真「日本の酒文化：現状と展望についての一考察」、高橋加奈子「魔女迫害の要因に関する一考察」、谷中章浩「1879年の外国皇族による北海道巡覧とアイヌ：『函館新聞』の報道を中心に」。病気観、酒に関わる文化、魔女など、いずれも歴史・統計資料を用いる分析・考察を行った。ま

た谷中は、新聞資料・開拓使文書史料から、外国皇族の北海道巡覧の詳細を明確化した。

社会教育コース・地域環境学グループ

・角田愛美「道央圏の里山市民活動から見る「北海道らしい里山」のあり方に関する研究」：札幌と栗山の2つの里山に関する市民団体の活動を通じて、里山の今日的課題と市民意識について検討した。

・河内美佳子「雪氷冷熱エネルギーの普及と将来性についての研究」：道内外の4地域事例(美唄・沼田・旧安塚・金山)の検討から、この新エネルギーの将来性と、地域振興への効果について、検討を行った。

・成田萌美「ソーラー発電の現状と課題」：筆者実家に設置されたソーラー発電機を端緒に、ソーラーアーク(岐阜県の三洋電機展示施設)や岩見沢でのソーラーウォール実験での取材を加味し、この新エネルギーの将来性についての検討を行った。

社会教育コース・福祉グループ

高齢社会における地域通貨の意義・可能性について、知的障害者の就労に関する調査、障害者のスポーツ参加についてー重度身体障害者のスポーツに関する意識調査からー、スヌーズレン実践の現状と課題を明らかにする、北海道内のバリアフリーに関する研究の5論文が提出された。いずれも現場での調査をもとにした実証的研究として高く評価された。

生涯教育課程・生涯スポーツコース

今年度はスポーツコーチング、スポーツ指導に関わる課題と学生個人の問題意識を反映した内容の卒業論文が以下に示すとおり8編提出された。「岩教大サッカー部のサイド攻撃に関するゲーム分析～日本代表との比較から～」(伊藤拓)、「体育・スポーツにおける男女平等に関する一考察」(前田瞳)、「学長杯における指導学生の発話内容の変容と選手の心理的競技能力について」(松山佳樹)、「運動部活動における体罰の再生産過程に関する一考察～教員養成系大学の保健体育科教員免許取得予定学生の調査を通じて～」(古内良輔)、「スポーツ教育モデルの中学校における実践研究～スポーツの生活化を目指して～」(木下裕子)、「バレーボールのブロックジャンプに関する研究～2種類の跳躍方法について～」(佐藤裕之、長田勝博、西山泰司、長谷川倫樹)、「女子大学生を対象とした主観的な月経随伴症状の軽減のためのセルフケアを組み合わせた簡便なプログラムの一考察」(田中麻美)、「漸増負荷運動による二軸走法が心拍応答ならびに血中乳酸動態に及ぼす影響について」(木崎次郎、山本俊郎)